

Nov.2023

11

No.553

建設業

しんぶん

建設産業の今を伝え未来を考える

特集

一般財団法人建設業振興基金  
経営基盤整備支援センター  
(経営改善支援課・人材育成支援課)の取組



今月のCCUS

便利機能が拡充!

# ますます安心。充実の制度。



契約者割戻金制度が始まっています。

契約者  
割戻金制度により  
掛金負担が  
軽減

手厚い補償

保険金区分合計  
最高5,000万円

労働者と企業の  
リスクを  
カバー

社員と家族、会社を守るために。

## 建設共済保険

法定外労災補償制度



今すぐ、ご加入を!

「建設共済保険」の他にも、次のような事業を行っています。

### 育英奨学事業

被災者(死亡および障害・傷病3級以上)の子供に対して、要保育期間および小学校から大学までの在学期間中、返済不要の奨学金を継続して給付。

### 労働安全衛生推進事業

- ① 安全衛生用品の頒布
- ② 女性専用トイレ・更衣室導入費用の助成
- ③ 安全衛生推進者表彰 等

公益財団法人

### 建設業福祉共済団

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-2-8 虎ノ門琴平タワー 11階

■ 取扱機関: 各都道府県建設業協会



正確な掛金の試算や資料請求はこちらまで



0120-913-931

受付時間 午前9:00～午後5:00(土日祝を除く)

建設共済保険

検索

<https://www.kyousaidan.or.jp/>

建設産業の今を伝え未来を考える

編集発行

一般財団法人建設業振興基金 〒105-0001  
東京都港区虎ノ門4-2-12虎ノ門4丁目MTビル2号館  
TEL : 03-5473-4584 FAX : 03-5473-1594  
URL : <https://www.kensetsu-kikin.or.jp/>

## CONTENTS

特集

一般財団法人建設業振興基金

## 経営基盤整備支援センター

## (経営改善支援課・人材育成支援課)の取組

02

- 高等学校建設系学科の教員を対象とした「建設ICT技術教育研修」の開催
- 第28回建設業経営者研修 どうする建設業!? ~残業規制と働き方改革、人材確保に向けて~
- 高校生向け出前授業「学校キャラバン」
- こども霞が関見学デー

## FOCUS

工業高校紹介

## 福岡県立浮羽工業高等学校

08

- インタビュー：松田 優希 先生

## PRESCRIPTION

## 日本経済の動向

10

- グローバルインフレからローカルインフレへのシフト

## 建設経済の動向

11

- 眼前の巨大市場を前に新たな競争が始まる

## 連載 かわいい土木【第51回】

12

- 青岩橋

／岩手県二戸市～青森県三戸町

## 令和5年度作文コンクール

14

お役立ち連載

建設キャリアアップシステム  
を活用しよう!【第13回】

17

いつでもチェック!!

建設業  
しんこうWeb建設産業の今を伝え  
未来を考える「建設業しんこう」は  
Webでも  
ご覧いただけます。

しんこうWeb

検索

<https://www.shinko-web.jp/>メルマガ登録は  
コチラから!

「建設業しんこう」に関するご意見・ご要望

TEL : 03-5473-4584 (企画広報部)

MAIL : [kikaku@kensetsu-kikin.or.jp](mailto:kikaku@kensetsu-kikin.or.jp)

印刷：日経印刷株式会社

©本誌記事の無断転載を固く禁じます。

# 経営基盤整備支援センター (経営改善支援課・人材育成支援課)の取組

## 高等学校建設系学科の教員を対象とした 「建設ICT技術教育研修」の開催

8月28日(月)～30日(水)の2泊3日、一般社団法人利根沼田テクノアカデミーのドローン技能訓練校において、高等学校建設系学科の教員を対象とした「建設ICT技術教育研修」を開催し、工業高校等の先生方6名にご参加いただきました。

この研修会は、高等学校の建設系学科で学ぶ生徒さんたちに、建設現場で活用されている最新のICT技術について学ぶ・知る機会を創出することは、建設業に対するイメージの改善、興味関心の向上を図る上で有効であるという認識の元、学校の実習や課題研究で取り上げて頂きたいという目的から、先生方を対象として、開催したものです。

研修会の最後には、学校で展開していく上での課題、研修内容等について活発な意見交換を実施しました。引き続き来年度の実施に向け、関係各位の協力の元、検討を図ってまいります。



### ●カリキュラム

	8/28(月)	8/29(火)	8/30(水)
講習内容	<b>開講式・ガイダンス</b> 講義：現状の建設業におけるICT活用 :3次元データの活用	講義：測定の最新技術① 実習：UAV写真点群測量 :UAV自動飛行(校舎に対して平行) :UAV(校舎に対して直角) :SfMソフトウェア実習(3次元データ作成) 講義：3次元データの作成の理論	講義：測定の最新技術② 実習：モバイル型LiDAR測量・iPhoneLiDAR実習 全日程の総まとめ・授業への反映について意見交換

### 研修に参加された先生方の感想は・・・

#### ●東京都葛西工科高等学校 建築科 **東 君康** 先生

この研修会で学んだことをいかに授業に取り入れることができると考えた時、最先端技術は毎年変わっていくこともありなかなか難しいと思われる。実習の根幹となるような内容で、まずは手軽な「パッケージ」として教えてもらえれば、今後先生方にも水平展開して広まるのが早いと思う。

#### ●群馬県立利根実業高等学校 創生工学科 **小川 健太郎** 先生

多くの教員に幅広く参加してもらって講習の工夫は必要だが、それ以外に特定の教員に深く学んでもらい、その教員から周囲の教員を感化させていくという方法もありだと思った。

#### ●東京都葛西工科高等学校 建築科 **小松 昌史** 先生

ICTに対する認識について、教員と第一線を知る方々との間にずれがあるように感じた。私が学ばないといけないICTは授業の効率化を図るためのものだという認識だったが、建設現場ではもうそんな次元の活用のされ方ではないということがわかった。

#### ●栃木県立那須清峰高等学校 建設工学科 **鈴木 良孝** 先生

ドローンに限らず、最新の建設技術やiPhoneのアプリを使って3次元データ作成など、教員がなかなか知ることができない情報を学べる機会は非常にありがたかった。

#### ●東京都立田無工科高等学校 建築科 **角田 智美** 先生

実際に建設関係の仕事に関わっている方でも、その工種の専門分野でなければわからないような最新の技術に触れることができ、刺激を受けた。私個人では得ることのできない知識や技術・技能を学ぶ機会をいただけたので、授業で活用できる方法を探っていきたい。

#### ●茨城県立水戸工業高等学校 土木科 **中村 泰子** 先生

教科書は基礎的基本的内容に加え、最新技術も一寸古いものが掲載されているので、最新の技術を含めた時系列で系統的に説明され、実際に演習や実習を交えて展開されるので、わかりやすく理解が深まり、知識・技能をアップデートできたと感じた。

経営基盤整備支援センターでは建設業の経営力強化や建設産業の人材確保・育成に資する事業を実施しています。8月～9月にかけて実施したイベントや研修会をご紹介します。

**P.02** 高等学校建設系学科の教員を対象とした「建設ICT技術教育研修」

**P.03** 第28回建設業経営者研修「どうする建設業!?～残業規制と働き方改革、人材確保に向けて～」

**P.04-05** 高校生向け出前授業「学校キャラバン」

**P.06-07** 「こども霞が関見学デー」

## 第28回建設業経営者研修

### どうする建設業!?～残業規制と働き方改革、人材確保に向けて～

9月22日(金)、東京都江東区にある木材会館にて開催した研修には、全国から約160名の参加がありました。今年のテーマは2024年4月より建設業にも残業規制が適用されるにあたり、経営改善やより良い職場環境整備の対応策、働き方改革と人材育成に積極的に取り組む優良企業の事例紹介等を通じ、「どうする建設業!?～残業規制と働き方改革、人材確保に向けて～」と題して開催しました。また、研修終了後には参加者交流会を実施し、ご参加の皆様は名刺交換され、地域や業種の垣根を越えて和やかに懇談されていました。

1	<b>講演①「働き方改革は経営戦略」</b> 講師 櫻井 好美氏(社会保険労務士法人アスミル 代表) <b>講演②「建設ディレクターが建設業界の働き方を変える」</b> 講師 新井 恭子氏(一般社団法人建設ディレクター協会 理事長)
2	<b>働き方改革等に関する優良事例のご紹介</b> 令和4年度建設人材育成優良企業表彰 国土交通大臣賞受賞企業 講師 草野 量文氏 草野作工株式会社(北海道)代表取締役専務 講師 黒木 繁人氏 旭建設株式会社(宮崎県)代表取締役社長
3	<b>～登壇者と参加者による意見交換会～</b> 櫻井 好美氏、新井 恭子氏、草野 量文氏、黒木 繁人氏 ☆コーディネーター:佐藤 正樹(建設業振興基金 経営基盤整備支援センター部長)
4	<b>参加者交流会</b>



「登壇者と参加者による意見交換会」では、参加者の方々から様々な質問が寄せられ、活発に意見が交わされました。以下に質疑応答の一部を紹介します。

#### 質問① 週休2日を取らせるにはどうしたらよいのか?

民間の仕事がほとんどのサブコンだが、ゼネコンの元請から工程表が送られてくるが週休2日では、間に合わないという実態が…。  
(都内の電気工事業の会社)

- ▶ 政治力を使う!ということも時には必要。1社1社の声は小さくても団結して訴えかけていくことが大事。
- ▶ ゼネコンは自分の社員が大事、サブコンの立場はつらいところだ。国が掲げた以上は責任を取ってもらわないといけないので、数多くの意見を集めて、関係機関に訴えることが必要。

#### 質問② フレックス導入を考えている。内勤は可能だと思うが、現場でもできるのか? (地方のゼネコン)

- ▶ 現場でのフレックス導入は聞いたことが無い。なかなか難しいのではないかな。
- ▶ 早出は16時にあがり、残りの仕事は代わりの者が担うということを試行的に行っているの、運用の状況を見ながらどうするか検討する予定。

#### 質問③ 選別受注は技術力があればできると思われるが、技術力と受注力の関係性を教えて欲しい。(民間の建築中心の会社)

- ▶ 働き方改革というよりも働きがい改革とし選別できれば良いが、選別受注するほどの実力はない。取った後にいかに効率的に工事を実施するか当社も苦労している。
- ▶ 技術力というのはi-Conであるとする、北海道はi-ConやDXが進んでいる。ずっと長くやってきているので、その間にメーカーとも試行錯誤しながら改良を重ねたこともあり、今では利益につながっている。

#### 質問④ 給料を上げることについて。(電気工事の会社)

- ▶ HPIに給与体系を載せていることもあり、年俸制でもあるので、新入社員も安心して働ける。さらに評価が高い人にはワンランクアップも行っている。
- ▶ 他の業界の給与水準も参考にしなくてはならない。建設業の中だけでは、難しい。
- ▶ 採用と定着という面で地域全体の給与についても参考にしないといけない。

# 高校生向け出前授業 「学校キャラバン」

建設産業人材確保・育成推進協議会では、平成26年度より建設業界・行政が一体となって小・中・高校を訪問し、生徒、保護者、教員に対し建設産業の社会的な役割やものづくりの素晴らしさを直接語りかけ、交流することを目的とした「学校キャラバン」を毎年開催しています。今年度は、新潟県立新発田南高等学校で開催しましたので、その概要や参加した生徒、関係者のインタビューなどについてご紹介します。



## ■学校キャラバン実施概要

**日時**：令和5年8月31日(木) 12:45～16:00

**開催校**：新潟県立新発田南高等学校

**参加者**：同校土木工学科3年生(約40名)

### 内容

- 体験1 『測量と施工の2役』杭ナビシヨベル体験 ..... (一社)北陸建設アカデミー
- 体験2 『職人が魅せる、日本の伝統技能』左官工 壁塗り体験 ..... (一社)北陸建設アカデミー
- 体験3 『見えない地中を分析・診断』地質調査 サウンディング体験 ..... (一社)新潟県地質調査業協会

### 授業風景

当日は37℃の猛暑の中、生徒さんたちは講師の説明を真剣な眼差しで聞き、普段学べない知識を吸収しようとする姿勢がうかがえました。こうした授業の風景をご紹介します。

#### 体験1 『測量と施工の2役』杭ナビシヨベル体験

講師：(一社)北陸建設アカデミー

この「杭ナビ」は杭打ち位置のガイダンスを行い、「ワンマン測量作業」を可能とし、効率を上げることでICT施工の幅が広がります。

生徒さんたちは、従来の建機と杭ナビシヨベルの両方を操作し、初めて操作することに戸惑いながらも、精一杯、操作に慣れようと奮闘し、一人で測量から掘削まで可能とする技術の高さに驚いていました。



#### 体験2 『職人が魅せる、日本の伝統技能』左官工 壁塗り体験

講師：新潟県左官業協同組合

「塗り壁」は日本古来から建築物に使われてきた、歴史のある建材です。

昔から、左官職人さんにより道具のこてを使って行われてきました。

漆喰、珪藻土はそれぞれに効果や効能があります。

生徒さんたちは、日本古来の技術を噛みしめながら、こての動かし方に苦労しつつも、少しずつ綺麗に壁塗りできる喜びを感じていました。



体験  
3

## 『見えない地中を分析・診断』地質調査 サウンディング体験

講師：(一社)新潟県地質調査業協会

地盤調査は建物を建てる前に、その地盤が建物の重さに耐えられるか等を確認するものです。主に従来の錘を付けて手動により貫入する方法と自動試験機により貫入する方法を学びました。

25kg等の錘を持ち貫入する方法を実践した後に、講師の自動試験機による実演を見た生徒さんたちは、その違いを肌で体感しました。



### 関係者の声

最後に、今回の学校キャラバンに携わった同校の先生、生徒さん及び講師の方の声をお届けします。

●新潟県立新発田南高等学校 土木工学科 石黒 一馬 教諭

「実習内容には時間的、設備的な制限があるので、とても有意義でした。また多くの講師の方々とのコミュニケーションを取る重要性を考え、今後も連携授業は必要だと改めて実感しました」

●新潟県立新発田南高等学校 土木工学科 生徒さんたち

「学校の授業では学ぶことのできない体験で、自分が職業選択する時に建設業を選ぶきっかけとなるような良い経験でした」

「壁塗り体験は難しかったものの、上手く塗ることができ嬉しかった」

「杭ナビショベルでは、三次元データでどこを掘ればいいのか教えてくれるので、2人体制ではなく1人で出来ることに感銘を受けました」

「地盤やサウンディングの試験の記録方法についてもっと学びたいと思いました」

●(一社)北陸建設アカデミー 中山 智之 ディレクター



学校キャラバン実施にあたり、先生からのテーマは仕事を「体験」出来る事でした。そこでICT(杭ナビ)建機体験で従来建機と杭ナビ建機の違いを通して新たな取組みと変化、左官(壁塗り)体験を通して伝統技能の必要性を体験して戴きました。

生徒さんの真剣に取り組む眼差しや上手く出来た時の笑顔が印象的でした。

今回の体験で建設業の技術・技能の必要性や習得の難しさ、ものづくりの楽しさ、魅力を感じて戴き、建設産業の担い手確保に繋がる活動になればと思います。

●(一社)新潟県地質調査業協会 小幡 季也 広報委員長



当日は猛暑の中、生徒さんが戸惑いながらも明るく元気に試験を体験してくれて嬉しかったです。

試験原理や試験機の自動化について少しわかってもらえたと思います。

日頃接する機会のない「地質調査業」ですが、土木・建設工事に重要な役割を担う職業です。関心を持ってもらい、将来「地質エンジニア」として活躍して欲しいです。

本機会をご紹介くださった石黒先生、準備調整をご担当いただいた関係機関の皆様にご感謝をいたします。



# こども霞が関見学デー

8月2日(水)・3日(木)の2日間、国土交通省などの各省庁において「こども霞が関見学デー」が開催されました。各省庁が連携し、子どもたちが広く社会を知りきっかけとすることを目的に、学校の夏休みに合わせて実施している同イベント。建設業界の情報発信を行う建設産業人材確保・育成推進協議会では、国土交通省でのイベントに参画し、屋外スペースではショベルカーによるデモンストレーションをとおして工事現場や災害復旧現場で活躍する建設機械の機能や役割を発信。また、子どもたちが実際に重機に乗っての記念撮影が行われました。屋内のブース、職人さんになってみよう!のコーナーにおいては石張りや石積みを専門的な分野で活躍している職人さんの指導のもと体験したり、関守石文鎮を作製!大工体験では、のこぎりを使って丸太を切り落とし、コースターを作製するなど、子どもたちは楽しみながら建設業にふれていました。

## 当日のプログラム

### 職人さんになってみよう!

～大工さん、庭師職人さんってどんなお仕事?～

#### ■庭師職人体験



石張りや石積み体験、関守石文鎮を作製

建設業の様々な仕事を、専門的な分野で実際に活躍している職人さんの技の実演や体験、展示を通じて知ってもらいました。

#### ■大工体験



継ぎ手模型の展示(体験)やコースター作製

### 建設現場ではたらく 建設機械を見学してみよう

#### ■フォークリフト見学



フォークリフトの役割や機能を間近で見学

さまざまな現場で活躍するミニショベルとフォークリフトによるデモンストレーションや記念撮影を行いました。

#### ■電動マイクロショベルと撮影



とっても小さいマイクロショベルに乗った記念の一枚

## 参加者の皆さまの声

乗ってみた  
かったから  
うれしかった！  
(4歳)

大きくなったら  
運転して  
みたい  
(5歳)

難しかったけど  
楽しかった！  
(小学校2年生)

ピラミッドみたいに  
石を積んでみて、  
大変だけど  
楽しかった！  
(小学校2年生)

作ったコースターで  
妹と遊びたい！  
(小学校3年生)

楽しかった！  
もっと乗りたい  
(小学校1年生)

自分で紐を選んだり  
できて楽しかった！  
(小学校3年生)

将来は  
大工さんに  
なりたい  
(小学校4年生)

建設機械見学

文鎮づくり

石積み

コースター作り

## 保護者の感想

- 技術や機械の進化など夢のある仕事だと思いました。
- インフラを支える建設業界の大切さをイベントを通して知ってほしいです。
- 頑張ってる建設業の方を目にするたび、尊敬するしかっこいいと思います。
- 上の子が大工さんになりたいと言うので応援したい。
- いろんなコーナーを回りながら体験することができました。
- ものづくりが好きな子なので喜んで参加しました。
- 建設業界に興味を持つきっかけになりました。



## 協力団体の皆さまの声

(有)千葉建業所



千葉 守さま

常日頃から若年者入職・育成について問題意識を持っていて、子どもたちと触れ合える機会があれば積極的に参加しています。子どもたちに直接技術技能の面白さを伝えられる今回の企画は非常に有意義なものだと思います。我々が今回用意した企画は鋸引き体験という単純なものですが、子どもたちは真剣に取り組んでいました。少しでも興味を掘り起こせたのであればうれしいですし、数年後にこの子たちが「働いてみたい!」と思える建設業界を我々は作っていかねばならないと感じました。



コマツカスタマーサポート(株)



武田 知久さま

子どもたちに建設現場で使われる建機やフォークリフトに関心を持ってもらえたらという思いで今年も参加させていただきました。建設機械に普段触ったり、乗ったりすることができないこともあり、子どもたちが楽しみにしていたのを強く感じました。中には建機のイラストTシャツを着て参加してくださったお子さまもいて、「本物の建機に乗れた!」とハンドルやレバーを嬉しそうに触れていたのが印象的でした。暑い中のイベントでしたが、皆さまの笑顔が暑さを忘れさせてくれました。



(有)米川造園



岡坂 杏さま

ひとつひとつ形の違う石を並べて組み合わせていく石積み・石張り。何も教えなくともあっという間にパズルのように作り上げていく子もいれば、1つずつ慎重に考えながら作り進めていく子もいました。物作りにはその難しさと同時に遊びのような楽しさがあります。作り上げていく楽しさと最後には達成感や満足感も感じられます。こういったワクワクした経験を基に、子供たちには自分がやりたい事を見極めていって欲しいと思います。



# FOCUS

あえて正解は与えない!多様な経験を通じて  
“自分の人生を自分で生きていく”  
という実感を深めてほしい!

雄大な耳納連山や悠々と流れる筑後川に代表される、豊かな自然に包まれた福岡県久留米市。福岡県立浮羽工業高等学校は、この地で創立117年目を迎える伝統ある工業高校です。2019年度より一人ひとりの進路に即したカリキュラムで学ぶことができるコース選択制を導入するなど、生徒自身の生き抜く力や可能性を伸ばす同校。その学びを支える想いや取り組み、日々の向き合い方について、環境デザイン科の松田優希先生に伺いました。

福岡県立浮羽工業高等学校  
環境デザイン科

松田 優希 先生



## 常に学びにあふれた環境 地域の課題にも向き合う

大自然に囲まれた気持ちの良い環境は、土木を学ぶ場としても適している。

「土木は自然と対峙しながら物事を進めていく分野。山地や河川など、教材となるものが身近にあるこの地域は学びの機会も豊富です。本校では地域の方々とも連携し、実践的な活動を通して知識と技術を身につけていくことができます。」

地域の暮らしやインフラと密接に関わ

る土木の仕事。その担い手を育む同校と地域との結びつきは強く、工業高校ならではの特色を活かしたテクノボランティアにも取り組んでいる。

「テクノボランティアは、3年生の課題研究の一環として住民や行政の方々と一緒に地域での課題解決に取り組んでいるものづくりボランティア活動です。環境デザイン科には環境建設コースとインテリアデザインコースがあり、それぞれの得意な領域を活かした取り組みを実施しています。例えば本校の最寄り駅である田主

丸駅にベンチやオブジェを寄贈したり、田主丸駅のPR動画を制作したり、商店街の中で使われなくなったシャッターにアートを描いたり、街の各所に看板を設けたり…。様々な形で社会貢献を図りながら、生徒の力を育てています。」

## 生徒が進みたい道を見つめられるようサポート

同校が2019年度から導入した“浮工得意技コース”は、1年次に共通で各分野の基礎・基本を学びながら、2年次より生徒自身が学びたいコースに進んで専門的な知識や技術を習得していくというもの。3年間の教育を通じてのポイントを伺った。

「1年次から進路への意識を持たせるための時間を計画的に確保し、学期毎に面談をして対話を繰り返しながら、生徒自身がそれぞれの資質や能力、自身の志向に沿った進路を選択できるよう図っています。特に1年次には広く楽しく業界を学べる教材を提供し、チームワークによるものづくりの楽しさを伝えられる実習に取り組んでいます。また本校に求人をいただく企業の皆さまにも、どのような学生が欲しいのか・現場や業界はどう動いているのかといったリアルな状況を伺うとともに、生徒たちの現状をお伝えし、お互いにミスマッチが起こらないよう意識しています。」

## コンクリート 実習

### 社会を支えるコンクリートの性質を学ぶ!

この日は1年生がコンクリート用材料の計量を体験。「まずは自分たちで自由に道具を使い、自由なやり方で試してもらいます。ほとんどの場合、配合や比率の調整がうまくいかず失敗してしまうもの。そうして試行錯誤を繰り返しながら取り組み、学んでいくことで、生徒たちは自ずと熱中していきます。こちらが正解を教えるのではなく、自分たちで見つけていくことが楽しさにもつながると思っています」と松田先生



例年、県内外から多数の求人があり、就職率100%を達成する同校。将来に結びつく資格取得のサポートにも意欲的だ。「測量士補試験と2級土木施工管理技術検定(第一次検定)については、授業の内容を交えながら試験対策をしています。生徒たちも合格に向けて頑張り、良い結果を出してくれますね。入学時にはあまり自信の無さそうだった生徒たちも、楽しみながら学び成長していく過程で、将来の資格の必要性を感じるようになり、3年生になるころには前向きに資格取得に取り組むようになっていきます」。

### 多くの選択や判断を通じて成長してほしい

民間企業を経て教職に就いた松田先生。教員として特に大切にしているのは、“正解を与えるのではなく、物事の多面性や新たな選択肢に気づかせ、考えさせ、判断させる”という姿勢だ。「生徒の疑問や課題にフラットな目線で向き合いながら、それぞれの人生が豊かになるためにどうすれば良いかをいっしょに模索していきたいと思っています。そのために気をつけているのは、“答えを教え



地域の課題解決に貢献するものづくりボランティア活動・テクノボランティアの取り組み。様々な形で社会貢献を図ることで、生徒の達成感や学ぶ意欲を高めている。近年には同校の最寄り駅である田主丸駅にて、ほっと一息つけるベンチや、小さな子どもたちも楽しめる顔出しパネルなどを製作・寄贈した



2023年7月の記録的な大雨により校舎1階などが浸水。環境デザイン科ではその苦難も、土木を学ぶきっかけとした。「陥没した道路の補修や泥・雑草などの撤去を行いました。通学時に原付や自転車で通る場所でもあるため、そうした場所が自分たちの手できれいになっていく様子を見て、生徒たち自身も喜びを実感していました」

すぎない”ということ。自らの頭でたくさん  
の選択や判断をするということは、自分自身を知る近道にもなります。他人や環境のせいにせず、主体的に動き、考え、判断する。そうした経験を繰り返すことで、“自分の人生を自分で生きていく”という実感を深めてほしいです。また、今はSNSなどでの些細な言葉遣いでも問題に発展しやすい社会。これを言われたら相手はどう思うか、この立場から見たらどう思うか…。そうしたことも物事の多面性を学んだり、自分自身で深く考える癖をつけることで捉えていけるのではないかと思います」。

松田先生が力を入れて取り組む環境工学基礎においても、生徒同士での対話やディベートなどの機会を積極的に設け、多面的な見方を養っている。「環境工学基礎は地球規模の環境問題から身近な住環境まで、社会のあらゆる課題を考える科目であるため、現実社会とリンクさせ、対話をしながら進めていくことができます。生徒同士でディベートを重ねることで、異なる意見に耳を傾けたり、自分自身の意見を主張することができ、多様な視点や考え方・伝え方などを体験的

に学んでいけます。そうした多くの経験をさせていくことが、私たちの役割なのではないかと思います」。

今後の目標は“国家資格である測量士補試験と2級土木施工管理技術検定(第一次検定)の全員合格!”と掲げる松田先生。「資格取得は生徒たち自身の成功体験につながるもの。本校で学んだことに自信を持ち、胸を張って社会に出て行ってほしいと思います」。

コレ推し!

### 土木建造物



若戸大橋(わかとおおし)

松田先生が故郷・北九州市のシンボルとして挙げたのは、洞海湾に架かる赤い躯体が目を引き、長さ627mの若戸大橋。1962年の開通当時には東洋一の長さで謳われた日本の長大吊り橋の先駆けであり、2022年に国の重要文化財(建造物)にも指定されました。夜間にはライトアップされ、美しい景観を楽しめます。



### 福岡県立浮羽工業高等学校

〒839-1233 福岡県久留米市田主丸町田主丸395番地2

WEB <https://ukiha-tech.fku.ed.jp>

## 日本でインフレは定着するか グローバルインフレからローカルインフレへのシフト

みずほリサーチ&テクノロジーズ 調査部 主席エコノミスト 有田 賢太郎

2021年の初め頃から、世界全体での物価上昇(インフレーション)の進展、いわゆるグローバルインフレが注目されてきたが、足元では地域によりインフレ圧力に差が生じ、グローバルインフレからローカルインフレへのシフトが起こっているといえる。そこで今回は、この変化の背景を解説するとともに、日本の物価の行方について考察する。

### 地域により異なるインフレ事情

「グローバルインフレ」という言葉が脚光を浴びはじめたのは2021年の初め頃だった。Googleトレンドでグローバルインフレという用語の検索数をみると、2021年から2022年にかけて、世界的に急速に増加した。しかし、2023年に入ってからはやや鎮静化してきている。

実際に足元の物価情勢をみると、米国や欧州ではインフレ圧力に苦しむ一方、中国ではデフレリスクが警戒されている状況であり、グローバルインフレというより、各国でインフレの様相が異なってきたのが実情だ。

### 供給制約の解消とともに財価格上昇は一服

振り返ると、2021年にグローバルインフレが生じたきっかけは、コロナ禍で各国の財(モノ)の生産活動に制約がかかったこと、そして、同じくコロナ禍でサービス活動が制約されるなかで、財の需要が高まったことだった(巣ごもり需要とも呼ばれた)。また、サービスと比べて財は、グローバルにサプライチェーンが構築されており、いったん価格が上昇すると、各国に広がりやすい点も特徴であった。さらに、ロシア・ウクライナ紛争で資源制約が意識され、資源価格が上昇したことも、世界全体のインフレに拍車をかけることになった。

しかし、その後は各国がコロナ禍から通常の経済活動に戻っていくなか、生産面・物流面などの供給制約が徐々に解消されていった。また、人々がコロナ禍の行動様式を修正する中で、財需要の伸びも徐々に収まったため、需給双方でひっ迫感が緩和し、財価格は落ち着きを取り戻しつつある。また、資源価格についても、特に影響が懸念された欧州で対策が打たれ、かつ暖冬で資源需要が思ったほど増えなかったという幸運もあって、2022年後半から価格は徐々にピークアウトしていった。足元では、再び資源価格に上昇の兆しがあり、警戒が必要であるが、2022年半ばのピーク時よりは低い水準にある。

### サービス価格の動きは各国で違い

グローバルな財価格の伸びが一服に向かうなか、サー

ビス価格が各国の物価の伸びを決めるようになっている。サービス価格は、財と比べ各国の需給で決まりやすい面があり、それが地域差を生んでいる。

例えば、米国では、コロナ禍から経済活動が正常化に向かう中でサービス需要が回復、労働供給もひっ迫し、賃金上昇とともにサービス価格の上昇が進んでいる。一方、中国では、不動産市場の調整が深刻化するなか、先行き不安から消費活動の回復が力強さを欠き、企業も新規雇用に慎重になっている。こうした需要の弱さが物価の低迷を招いている。

### 日本におけるインフレ定着の可能性

翻って、日本はどうだろうか。日本は1990年代前半のバブル崩壊以降、物価は低迷してきた。日本企業はコストが上昇しても価格転嫁せず、生産性改善で吸収する、或いは事業展開に慎重になる、といった行動を選択するケースが多く、デフレマインドが強かった。

しかし、足元の日本の外部環境を考えると、日本のサービス活動は回復基調にあり、また元々構造的に人手不足であることから、需給双方の点で、過去になくサービス価格を上げやすい環境であることは間違いない。実際に、価格転嫁の動きが幅広い業種で確認されるなど、変化の兆しが明らかに出てきている。

もっとも、足元の価格転嫁の動きが、今後も定着するかを判断するにはもう少し様子を見る必要があるだろう。ポイントは、企業が賃金を本格的に引き上げ、更にそのコストを価格転嫁するかどうかにあるとみている。その試金石となるのは2024年春の春闘(労働組合が毎年春に行う賃上げ要求)だろう。

2023年春の春闘でも、例年になく水準での賃上げが実現することになったが、その理由は財価格上昇への対応という、ある意味で受け身の姿勢での賃上げであった。しかし、財価格上昇の一服が期待される2024年春の春闘で、企業が人材確保を起点とした積極的な賃上げを行うことが確認されれば、あきらかな企業行動の変化といえるだろう。長らく続いた物価低迷のトレンドが変わり、インフレが定着するのか注目される。

### 眼前の巨大市場を前に新たな競争が始まる

日経クロステック建設編集長 浅野 祐一

燃料価格の高騰を受け、再生可能エネルギーに注目が集まっている。なかでも立地面の制約が比較的少ない洋上風力発電への期待は大きい。国も洋上風力発電の大幅拡大にかじを切っている。こうした状況を見越した大手ゼネコンなどによる洋上風力発電市場への参入が活発になり、技術・人材の両面での競争が激化しつつある。

洋上風力発電の市場に注目する大手ゼネコンが増えている。象徴的な動きが建設会社によるSEP船(自己昇降式作業台船)の建造だ。SEP船は洋上風力発電の要となる風車の据え付け工事などに欠かせないツールで、船から脚を出して海底に着床させ、波浪の影響を受けないよう船体を海上に持ち上げることができる。ただ、特殊な船なので建造費は安くない。

例えば清水建設は、揚重能力が2500トンに達するクレーンを備えたSEP船の建造に約500億円を投じた。2022年10月に完成した船は自航可能だ。同社のSEP船は完成後、順調に稼働を続ける。24年2月からは、台湾沖の洋上風力発電所のプロジェクトで活躍する予定だ。同社はこの船を武器に、洋上風力発電の設計・調達・施工の分野で高いシェアを獲得する方針を掲げている。

五洋建設と鹿島、寄神建設は、共同でSEP船を建造した。1600トン吊りのクレーンを搭載した船で、23年9月に完成を発表したところだ。同年11月から北九州響灘洋上ウインドファーム建設工事で、容量が9600kWの風車25基の基礎工事の一部と風車据え付け工事で活躍する予定となっている。

このほか、大林組と東亜建設工業が共同で建造してきたSEP船が、23年4月に完成した。こちらは1250トン吊りのクレーンを備える。

#### 背景にある20兆円市場 人材争奪戦も巻き起こる

海洋土木を中心に手掛けるいわゆるマリコン以外のゼネコンがSEP船の建造に踏み切る背景には、国の方針がある。21年10月に閣議決定された第6次エネルギー基本計画では、前年12月にまとめた「洋上風力産業ビジョン」に基づき、30年までに1000万kW、40年までに浮体式も含めて3000万～4500万kWの案件形成を目標に掲げている。

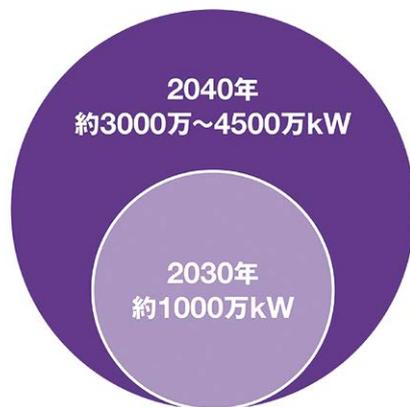
22年12月から段階的に商業運転を始めた能代港洋上風力発電所と秋田港洋上風力発電との合計容量

が約14万kW。単純計算でこの規模の発電所を200件以上整備しても40年までの計画に及ばない。前述の秋田における洋上風力発電の総事業費は約1000億円なので、単純計算でも20兆円以上の巨大市場を期待できる。

洋上風力への市場参入を図るのは、大手ゼネコンだけではない。建設コンサルタント会社も環境影響評価や地元における合意形成といった分野で事業を拡大する。建設場所の選定や施工条件の決定に必要な海底地盤の調査も有力な業務だ。他にも、漁業への影響を確認する調査業務などもある。多様なニーズを背景にして、応用地質のようにグループ全体の売上高の約6分の1を洋上風力関連業務が占める企業も出てきた。

人材の争奪戦も起こっている。洋上風力の建設事業で活躍できそうな技術者を必要としているのは、ゼネコンだけでなく、再生可能エネルギー事業を手掛けるエネルギー会社も同じだからだ。大手ゼネコンなどから、大手エネルギー会社に転職するような事例も出てきている。

洋上風力発電をめぐる技術開発や人材獲得競争は、今後も激化していく可能性が高い。



国は2030年までに1000万kW、40年までに3000万～4500万kWの案件形成の目標掲げる  
(資料:資源エネルギー庁の資料を基に日経クロステックが作成)

第51回

かわいい

土木



せいがん  
青岩橋

岩手県二戸市～青森県三戸町

# 二つのまちの縁をつなぐ トレスル橋

江戸時代にはいずれも南部藩に属していた岩手県二戸市と青森県三戸町。二つのまちの交流は明治以降も続き、県境の川を渡る橋の存在が欠かせなかった。トレスル橋脚を有する青岩橋は、洪水による度重なる落橋の末、地元の人々が待ち望んだ恒久橋だ。

Photo・Text ▶ フリーライター 三上 美絵

大成建設広報部勤務を経てフリーライターとなる。「日経コンストラクション」(日経BP社)や土木学会誌などの建設系雑誌を中心に記事を執筆。広報研修講師、社内報アワード審査員。著書『土木技術者になるには』(ペリカン社)、本連載をまとめた『かわいい土木 見つけ旅』(技術評論社)



岩手県と青森県の県境を流れる馬淵川。国道4号の旧道がこの川を渡るところに架かっているのが、青岩橋だ。「青森」と「岩手」から一文字ずつ取って命名されたものだと言われているが、字面が「青い岩」を思わせ、馬淵川の清流が目につかぶ、なかなか風流な名称だ。

## 江戸時代から続く 二戸と三戸の交流の歴史

青岩橋が竣工したのは、昭和10年(1935年)。前身の木橋が大正3年(1914年)に洪水で流されて以来、20年以上のあいだ仮橋の状態が続いた後、ようやく現在の鉄橋が架けられた。

『鉄の橋百選—近代日本のランドマーク』(成瀬輝男編、東京堂出版)によれば、木橋の時代には、青森と岩手が20年ごとに交代で橋を建設し、その期間中に流失した場合には、建設した県が再建する取り決めだったという。橋を挟んで対岸に位置する二戸と三戸は、江戸時代にはいずれも南部藩の領内にあり、文化交流があったのだ。

それだけに、相互に行き来のしやすい橋、しかも丈夫な鉄の橋を求める地元の声は大きかったのだろう。国道の橋なので、工事は当時の内務省直轄で行われたものの、工事費は地元が負担した。請願によって架けられた経緯から、青岩橋の「せいがん」という音にかけて「請願橋」とも呼ばれたらしい。

青岩橋の竣工を報じた『土木建築工事画報』の昭和10年11月号には、竣工式に来賓約300人のほか、数千人の見物人が集まったことが記されており、期待の高さがうかがえる。花火を合図に始まった渡り初めでは、神官の先導で「青森岩手両県の3夫婦2組」と参列者一同が橋を渡った、とある。

余談ながら、江戸時代から各地の橋の渡り初め式には、長老一家の3世代(親子・孫)の夫婦が、行列の先頭を歩く風習があったようだ。青岩橋でも、両県から3世代の夫婦が各1組、選出されたのかもしれない。長寿で仲睦まじい夫婦にあやかり、橋の完成に川の両岸を末永くつなぐ願いを込める。両方のまちの人々の絆の深さを感じさせるエピソードだ。

## 現存する日本で最長の トレスルの橋

この橋のドボかわいいところは、何と言っても「トレスル橋脚」にある。脚立を開いたようにも見える、鉄塔に似た橋脚だ。山陰本線の余部鉄橋(2010年に廃止、一部保存)や、以前にこの連載で紹介した東急池上線五反田駅の高架橋(かわいい土木第47回

しんこうweb <https://www.shinko-web.jp/series/12036/>)にもトレスル橋脚が使われている。

トレスル橋脚は、欧米で1860年から鉄道が谷を渡る個所に多く建設された後、工業品として海外に輸出されるようになった。



▲開いた脚立の上に桁を乗せたような独特の見た目がドボかわいい。



▲ 国道4号青岩バイパスの青岩大橋から見た青岩橋の全景。トレスル橋脚の高さは12.78mもある。

日本は、明治時代半ば以降にこうした製品を輸入して鉄道橋に使用。国産化が可能になってからも、トレスル橋脚が使われたのはほとんどが鉄道橋で、青岩橋のように道路橋に採用された例は珍しいという。

青岩橋の橋長は189m。国土交通省の十和田国道維持出張所のサイトには、「余部橋梁が供用を停止してからは、青岩橋が日本最長のトレスル橋である」とある。土木学会は、この橋を2006年度の選奨土木遺産に選出した。

国道4号は現在、バイパスが整備されており、馬淵川を渡る個所には、新たに「青岩大橋」が架けられた。旧道の青岩橋は、数年前まで人道橋として地元の人々に使われ続けていたと聞かすが、私が訪れた2023年5月下旬には、全面的に通行止めになっていた。橋脚や桁も、傷みを感じられる状態だ。

川の兩岸の二つのまちの交流の歴史と、橋梁技術の歴史を体現するこの貴重な橋を、後世へ継承する手立てはないものか。このまま朽ちさせてしまうのは、あまりにも惜しいように思われる。



## アクセス

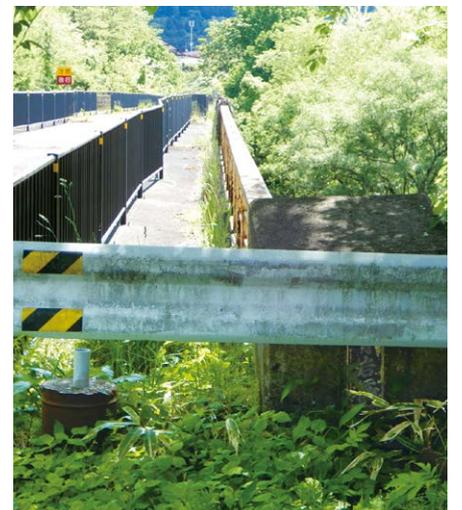
いわて銀河鉄道目時駅から  
徒歩約20分。JR東北新幹線  
二戸駅から車で約20分。



▲ 自動車道の役割をバイパスに譲った後も人道橋として供用されていたが、取材時は全面通行止めになっていた。



▲ 桁の形式は鋼プレートガーダー。長さ20mの鋼板を9本連ねてある。



▲ 親柱には「青岩橋」と橋名が彫られているのがかろうじて見える。

# 令和5年度 「作文コンクール」 受賞作品が決定!

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、高校生の方と建設産業で働く方を対象とする作文コンクールを実施し、優秀な作品を表彰しています。今回は、国土交通大臣賞に選ばれた3作品をご紹介します。



## 高校生の作文コンクール



## 国土交通大臣賞 受賞作品



山形県立  
山形工業高等学校  
土木・化学科  
土木技術コース 2年  
高橋 龍之介さん

### 見えないHERO

#### 受賞者ヘインタビュー

■Q1 私が書いた作文の世界観が、このようなとても大きな賞として評価して頂けたことがとてもうれしいです。作文は得意な方だと思っているのですが、そういった得意な分野で自分の力を伸ばすことができたので良かったです。 ■Q2 私が住む南陽市吉野地区で発生した水害の経験で、ものづくり自体に興味を持ち、工学の世界、特に災害に強い街づくりについて学びを深めてみたいという思いと部活動を両立し頑張りたいという思いから、山形工業高校を志望しました。 ■Q3 私は土木・化学科で土木技術コースを選択して学んでいます。測量実習をはじめとした自分の中で土木の王道といった学習から、構造設計や施工の基礎など、必要な知識・技術の学習を幅広く学んでいます。 ■Q4 山形工業高校で学んでいる知識や経験、部活動の柔道で学んでいる自分で考える力、恐れず前に出る気持ちを忘れず、地元の山形県や南陽市に貢献できる技術者になりたいと思っています。

『みえない時間に、みえない場所で、みえない誰かを想い...』。この言葉はあるCMで使われていた曲の歌詞※の一部です。私が学ぶものづくりの世界、土木の世界はまさしく、この歌詞のとおりだと思います。それを、「誰にも気づかれない地味な仕事」と言われたり、「男社会のきつい仕事」と捉える人も中にはいるでしょう。でも、決してそんなことはないと思うのです。

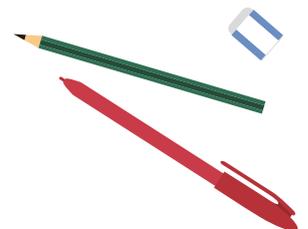
私が工業高校、しかも土木の学科に入学しようと思ったきっかけは、水害を経験したことからです。私の暮らす地域の多くの場所で、床上・床下浸水が発生し、小屋が流されたり、橋に流木がつかえ、川の水があふれ出ました。五十年に一度、百年に一度の豪雨により、様々な被害が発生しました。私の家も沢からの水により浸水し、土砂によって池や畑が埋まりました。当時、小学一年だった私でもこの状況はただ事ではないと、不安や心配で怯えていたのを今でも鮮明に覚えています。明日どうなるのかもわからない中で、私にとって希望に見えたのが、地区中のあちらこちらで、毎日全力で復旧作業にあたる土木関係の方々の姿や、私の家の復旧に関わっていただいた建設業者さんや大勢のボランティアの皆さんの姿でした。夏休み中の出来事だったので、普段はなかなか見ることのない土木作業を間近で見ることができて、私自身初めて土木工事に対して興味を持つきっかけとなりました。それから後に家の裏に砂防ダムの建設が始まったり、土砂災害の出前授業を体験したり、身近でものづくり、特に土木の必要性和大切さを学ぶ機会をたくさん経験することができました。

水害での経験や、ものづくりに関わる経験は誰でも得られるものではありません。私だから持っている貴重なものです。

そんなことを考えたときに、工業高校で土木を学ぶことが自分らしい進路選択だと決断しました。高校では、土木についての知識や技術を学んでいます。今までであれば行けなかったダムの内部を見学したり、測量機器に触ったり、高校に入学してからの短い間で、今まででは考えられないような新しい経験をしながら日々学んでいます。そんな高校での時間や、私自身が人生の中で経験したことなどを織り交ぜてこの作文を書こうと考えたとき、ある事に気づきました。

水害の時に復旧に関わっていた建設業者の方々も、今現在学んでいる工業技術も、見えない誰かが毎日を笑顔で過ごすためのものだということ。普段誰にも気づかれなくとも、私たちが日常を過ごすために全力を注いでいるのが、土木のものづくりだということです。ものづくりは、見えないもの。見えない誰かを思って、今日も朝から働く工事関係者の皆さんこそ、私は世の中の真のHEROであると思います。なぜなら、HEROはそう簡単に姿を見せてはくれないのだから。

※出典:応援ソング 作詞:三菱電機ビルソリューションズ(株)CM制作チーム  
(旧 三菱電機ビルテクノサービス(株)),2016年



#### 受賞者ヘインタビュー

#### 高校生の作文コンクール

- Q1 受賞された感想を教えてください。
- Q2 なぜ工業高校に進学しましたか? 建設系の勉強をしようとおもったきっかけ等
- Q3 学校ではどのような勉強をしていますか?
- Q4 将来の夢を教えてください。



株式会社小野良組  
熊谷 宗浩さん

## ICTを転がせ

### 受賞者へインタビュー

■Q1 受賞の連絡を受けた時は、頭が真っ白になり、え、、、と固まってしまいました。自分の身の丈に合った仕事をしていた自分には身に余る光栄ですが、素直にうれしく思います。 ■Q2 今は会社の上司ですが、軽いタッチで「現場管理やってみない」と誘われたのがきっかけでした。初めは施工の難しさにばかり目がいき苦しいことの方が多かったのですが、次第に達成感が苦しさを上回るようになり、今に至ります。 ■Q3 代理人を務めていた大規模な復興関連の工事が3月に竣工し、現在は幾つかの現場のサポートをしています。新たな工事を受注し代理人として着任するまでは、新しいシステムや技術などを習得しています。 ■Q4 本文でも触れましたが、年齢が隔てる壁というのは案外大きいもので、流行物に敏感で吸収力もある若手技術者と知識や経験が豊富な先輩方、双方の中間点にいる自分がその橋渡しをできればいいなと思っています。お互いの足りない部分、お互いの優れた部分を補完し共有し合えば、転換期の波にも上手く乗れるような気がしています。

身動きがとれないまま一夜をその場で過ごし、震えながら迎えた朝、小雪が舞う中自宅までの20kmの道のりを歩き始めたのは、もう12年も前のこととなります。歩き始めてしばらくすると、私と同じ建設業関係者らしき3人の男性が、道を塞ぐ瓦礫をバックホウで取り除いている姿が目に入りました。

入り組んだ海岸線沿いの町は、1本の道路が寸断されるだけでライフラインが絶たれます。海は流出した重油で焼かれ、誰もがこの町に一体何が起きたのか理解しきれておらず、行政からの要請も行き届いていない段階で、命の道を通すため懸命に作業する姿は、今も目に焼き付いて離れません。ともすれば自衛隊や消防・警察の活躍ばかりがクローズアップされがちですが、ニュースにならない裏側で懸命に作業をしている人たちがいました。その後、私自身も、停止した火葬場の代わりに急遽整備されたご遺体の仮安置場所で、その後再開した火葬場へご遺体を運ぶため掘り起こす作業に従事しました。彼らや私だけでなく、あの頃、繰り返す余震に怯えながら混沌とした目まぐるしく変わる状況の中で、いち早く重機を動かし、瓦礫を撤去し、道を拓いたのは私たち建設業者です。この町を再興に導いたのは、間違いなく建設業界で働く私たちなのです。私は苦しかったあの経験を経て、自然災害が多発するこの日本で、誰かが再び起き上がるために建設業界は必要な支柱であらねばならないと、強く心に誓いました。そして、誰かのために尽力できることを誇りに思いました。

一方、建設業界は、未だに「きつい・汚い・危険」という悪しき呪縛に囚われています。

仕事に対する「魅力」のうち、災害等から社会を興す「力」、馬力・底力はあっても、人を惹きつける「魅」の部分が欠けているからだと私は考えています。

では、「魅」を満たすにはどうすればいいのか。

確かに、雨天時や真夏の炎天下での作業は男性でも厳しく、工期が迫り残業が続けば身なりは薄汚れ、下請会社のオヤカタにも怒鳴られ・・・、そのような経験は私にもあります。これでは若い人たちが集まらないのも頷けます。このまま高齢化が進み離職する人が増えれば、深刻な人手不足に陥ります。

しかし、建設業界は今、変わりつつあります。

震災後私が担当した現場では、施工担当者・事務担当者で相談し合い、カレンダー通りに施工ができるよう、また、長期休暇の前にはプラス1日～2日休めるよう予め作業日を設定し、積極的に休暇を取れるような仕組みをつくり実践してきました。更に、残業0時間を目標に、作業や役割を分担すること

で、全員が「残業をしないことが当たり前」の環境に慣れ、合理的に現場を進めることが出来ました。

週休二日制の導入、人手不足・高齢化・危険作業をICTで払拭する試みも始まり、女性が活躍できるような推進モデル工事の活用も推奨されています。国は新3K「給与・休暇・希望」を掲げ、バックアップ体制も整いました。もちろん、建設業界で働く私たち自身も、襟を正していかなければなりません。悪しき風評を放置しておいたのは、私たち世代でもあるのですから。

半ば熱量に動かされて駆け回った日々は過去となり、今、建設業界は大きな転換期を迎えようとしています。そろそろ、未だにまとわりついている建設業界に対する「きつい・汚い・危険」という昭和のイメージを覆す時なのです。

週休二日制の導入でメリハリのついた仕事をする事ができれば、休日はゆっくり過ごすことができ心身ともにサッパリする（「きつい」「汚い」がなくなり）、ICTによって合理化された職場環境の中では視えない危険が明らかとなり（「危険」を回避する）、より安全な作業ができる。これからはそういう時代です。そして、過去の実績や経験値にばかり囚われるのではなく、時には若い人の柔軟さから学んでいかなければなりません。若い世代と古い世代が相互に矢印（⇄）を向け合えば、ICTも上手く転がり始めると思うのです。

スーツを着てネクタイを締めて現場に出るわけにはいきませんが、iPadを片手に颯爽と現場を歩き回る姿を子供や若い人たちに見てもらいたい。無事竣工を迎えた時のあの達成感や感動を建設業界で働く全ての人たちに一緒に味わってほしい。効率化した作業により増えた休暇で、誰もが充実した時間を過ごしてほしい。

そして、私はこれから、建設業には自然災害から社会を興す機動力があること、そこで働くということは構造物（「モノ」）を造り上げる達成感を感じられること、さらに最新の技術を使える面白さがあることや余暇を楽しめる充足感があること、他産業に劣らない「魅」の部分が沢山あることを伝え、未来を生きる人たちのためにバトンを渡す準備を進めていきたいと思っています。

### 受賞者へインタビュー

### 私たちの主張

- Q1 受賞された感想を教えてください。
- Q2 建設業へ入職したきっかけを教えてください。
- Q3 現在はどのようなお仕事をされていますか？
- Q4 今後の目標を教えてください。



株式会社橋本店  
千葉 君杜さん

## 私が見た建設業の力・技術

### 受賞者ヘインタビュー

■Q1 この度は、名誉ある賞を頂戴し誠に光栄に思います。入社以来多くの先輩方にご指導頂いたおかげだと存じます。この賞は先輩方のご協力あっての賞だと思っています。これからも初心を忘れることなく、精進して参りたいと思います。

■Q2 私が小学4年生の時に発生した東日本大震災の被災を受け、生まれ育った町を復興へと導いてくれた建設業に憧れ、私も建設業界で経験と知識を身につけ、災害が発生した時に「人」を「町」を前へと導く力のある建設業を仕事にしたいと思ったのがきっかけです。

■Q3 私は現在、施工管理として働いています。具体的な作業内容としては工事の工程管理や品質管理、工種ごとに工事写真を撮影し提出書類としてまとめる作業を行っています。

■Q4 私の目標は施工管理技士として1人前になることです。そのために現在は仕事で経験を積み、技術を見て知識として学び、自宅では1級施工管理技士取得に向け勉強に励んでいます。まだまだ未熟ではありますが、これから資格を取得し、先輩方から仕事を任せていただけるような人材になっていきたいと思っています。

「これからどうなっていくかよく見とけ」これは私が小学4年生の時に起きた東日本大震災で被災し、変わり果てた町を見て建設業界で働いている父が私に言った言葉です。私の生まれ育った町は宮城県本吉郡南三陸町。町の8割が津波にのまれ東日本大震災で被災した地域の中でも特に被害が大きいとされた地域でした。変わり果てた町の姿、絶望する人々、町から去ってゆく人々、人間の脆さ、人同士の争い。当時小学4年生の私にはあまりにも衝撃的な光景と、言葉で言い表す事の出来ないような感情が深く刻まれたのを覚えています。そんな状況の中、余震と再度津波がくる事を考慮し避難場所を移すため内陸へと家族で瓦礫の中を歩いている時でした。私が最初に目にしたのは瓦礫撤去作業を行う建設業界の人々でした。建設用機械で瓦礫を移動し道路を切り開き、私たちの歩く道を作っていました。当時の私にはその道を使って自衛隊の方々が入って来られるようになった事など知る由もなく、ご飯やお風呂、服や布団など衣食住の支援をしてくださった自衛隊の方々がすごい。と思うばかりで、そこに確かにあった建設業の力に気づく事ができませんでした。そこから時が流れ私に変化があったのは仮設住宅が町の高台に次々と建設され、避難所生活から自分たちの家へと移り変わる時でした。当時の私が初めて建設業の力をすごいと感じ、認識した瞬間でした。ものすごい数の住居と環境を作り上げ、人々にこんなに感謝される仕事が建設業なのか。と思ったと同時に建設業に憧れを抱くようになり、さらに町の変化に人一倍、目を向けるようになりました。それから歳を重ねるごとに徐々に父が私に言った言葉の意味がわかり始めました。町の瓦礫がどうやって無くなったのか、防波堤がどうやってつくられるのか、道路は誰が作っているのか、町全体の嵩上げは誰がやっているのか、山を開き新しい土地を作り建物をつくっているのは誰なのか、全て建設業の力だと自分の目で見て初めて理解する事ができ「町は建設業の力で復興する」と私は確信しました。その時に私のやりたい仕事は決まりました。それは人々が絶望するような状況を変える力がある建設業でした。

それから12年の歳月が流れ、現在私は小学4年生の時に目にした自分の町の瓦礫を移動させ、復興への第1歩目の作業を行っていた建設会社に入社し、まもなく3ヶ月が経とうとしています。現場配属後なにもわからず、職人さん達とも話ができず、先輩に少しずつ教えていただいた仕事をこ

なす日々で、私の中でのイメージと現実のズレを感じていました。とりあえず「見る事と自ら聞く事」をしてみようと思い、先輩と職人さんが何をしているのか見て、疑問があれば声をかけ「教えてください」と行動するようになりました。すると任せてもらえる仕事が増えたり、職人さんが「現場は慣れたか?」「今日の朝礼良かったぞ」と声をかけてくれたりするようになりました。私の今の仕事は工種ごとに職人さんが行う作業の写真を撮影し、書類としてまとめる事です。その中で見る職人さんの技術力や精度の高さに驚く毎日です。しかし私が質問をしたり、話を聞いたりしていると「若い人がいない」「担い手がない」とよく耳にする事があります。私はこれこそ現在建設業界が直面している人材不足問題そのものなのかと感じさせられました。やはり世間のイメージでは今でも建設業は「3K」のままであり、これから働く人達が憧れる職業としては難しいのが現状だと思います。それでも私は建設業の力に助けられ、憧れ、実際に建設業界で働いている事に誇りを持っています。そこにはより身近で感じた建設業の力、技術力の高さが私をそうさせたと感じています。そんな私には「3K」や「人材不足」などで今の職人達の持っている高度な技術、建設業の持っている力を衰退させていいとは思っていません。東日本大震災の記憶を忘れてはならないのであれば、あの時に「どのようにして町が復興へと向かったのか」も忘れてはいけません。だからこそ私は今を生きる人々に建設業の持つ力と技術を知ってほしい。「あなたの住んでいる家」「あなたが通っている学校」「あなたが見上げているビル」全て人の手で造られたのです。そこには建設業という大きな力の中に幾万とある職人の技術が詰まっています。そこに興味を持ってほしい。触れてほしい。そのために私は自分が肌で感じた「建設業の力・技術力の高さ」を多くの人へと伝えて行きたいと思っています。これから先、建設業に携わる人が増えれば建設業はもっと進化します。私はそう信じてこれからも建設業の力の一部として、建設業と共に進化を続けていきたいと思っています。

### 受賞者ヘインタビュー

### 私たちの主張

Q1 受賞された感想を教えてください。  
Q2 建設業へ入職したきっかけを教えてください。

Q3 現在どのようなお仕事をされていますか?  
Q4 今後の目標を教えてください。





# FRONTIER

フロンティア

建設の最前線へ!

## PROFILE

おおいし しょうご  
大石 尚悟 さん  
株式会社濱崎組  
愛媛県出身



## 「この仕事はチームワーク!」建物づくりに欠かせない左官職人を束ねるリーダー。

手仕事と呼ぶにふさわしい緻密な技により、壁面や床面のコンクリートを滑らかに仕上げる職人——建物の耐久性や快適性、美観までも高める左官工事は、建物づくりに欠かすことのできない仕事だ。「低層階から上層階へと仕上げていくにつれ、作業に関わる人数も増えていきます。今携わっている現場は、ちょうど低層階が仕上がったタイミング。これからさらに忙しくなりそうですが、自分たちの手で綺麗に仕上げられた瞬間は達成感も格別です」。そう話すのは、株式会社濱崎組において施工から現場管理を担う工事長を務める大石尚悟さんだ。

登録左官基幹技能者や左官1級技能士などの資格を有し、職長として現場を指揮する大石さんだが、入社当時は全くの未経験で右も左もわからない状態だったそう。「水産高校で学んでいたのですがちょうど造船業の求人無く、当時の担任の先生から「左官という仕事もある」と、濱崎組のパンフレットを渡していただいたことが入社のかっけです。壁を塗る姿やセメントを扱う仕事に興味を覚え、左官工事業の世界に入りました。タイミングが違えば全く異なる職種だったのかも考えると、運命的な出会いなのかなと思います(笑)」と当時を振り返る。「建設業はいわゆる職人氣質の厳しい世界というイメージでしたが、入社後は周りの方もすごく温かで、丁寧に指導してくださいました。また当社の場合、建設業において一般的な徒弟制度ではなく、会社全体で新人を教える独自の教育システムを設けています。あわせて松山

共同高等職業訓練校和泉分校としても認可を受ける社内技能研修センターを中心に、左官に必要な技術や知識を育む体制を取っているため、私自身もしっかりと学んだ後、現場に入っていくことができました。

その後、工場やマンションの建設現場などに携わり、経験を重ねてきた大石さん。「印象深いのは、以前に携わった発電所の現場。真冬の時期だったので屋上のコンクリートがなかなか乾かず、仕上げに苦労しました。また現場によっては、逆に乾くのが早すぎて綺麗に仕上がらないという場面も。材料の品質や配合量はもちろん、気温や湿度、周囲の風など環境も様々なので、それぞれの現場に適した対応が求められます。そして現場を円滑に動かすためには、人員の配置を含めた段取りも重要。人の相性や若手・ベテランの組合せなどを考慮し、いかに綺麗な仕上げにつながるか、その人の成長につながるかなどを意識しています。そうした部分は、日々勉強の毎日。うまくいかなかったことは反省しつつ、「次はこうしてみよう」と、常に新鮮な気持ちで現場に入っています」。

職人という孤高の存在のようなイメージもあるが、決してそうではないと大石さんは話す。「この仕事はチームワーク。1人では何もできません。私も社内や現場の職人の皆さんにいつも助けてもらっています。また簡単ではない分、色々な現場を経験していくほどに面白くて奥深い仕事。ぜひ若手の皆さんにも、どんどん入ってきてほしいです!」

## Great Job!



株式会社  
濱崎組  
代表取締役

濱崎 増司 氏

創業以来途切れることなく60年間続けた新卒採用と育成ですが、今回、建設人材育成優良企業表彰『優秀賞』という評価をいただき、関係各位のご尽力に感謝申し上げます。

デジタル化が急速に進む世の中でも、建築技能工の「機械には代えない仕事」「人の手」には計り知れない可能性があると考えています。人材確保や労働時間管理、女性活躍など課題は山積していますが、今後も「本物追求」のスローガンのもと次世代への技能継承を積極的に行ってまいります。

建設人材育成優良企業表彰『優秀賞』を受賞